震災をマイナスにしたくない。犠牲になった方たちのためにももっともっとよくしなければ

松野美紀子さん（39歳・主婦）

福島県南相馬市に住む松野さんは地震の後、「家に残る」と言い張る中学生の娘を無理やり連れて、息子の通う小学校にかけつけました。「耐震校舎でなかったので心配で。子供たちは無事でしたが、寒さで震えていました。そこで毛布を取りに海辺の自宅に戻ったんです」。毛布を車に積んで小学校に戻る道すがら、ふとバックミラーをみると、そこには虹が映っていました。「娘に『津波が来る！後ろ見てろ！』と叫んで、思い切りアクセルを踏み込み、クラクションを鳴らして前方の車に津波を知らせながら小学校へ急ぎました」。そして、子供らが避難したことを確認すると、高台へと逃れました。屋根よりもはるかに高い高さで、白い、雲のような水しぶきを上げた波の壁が町を襲い、一気に飲み込んだのです。「山の上から瓦礫が流れていく様子を呆然と見つめました。」

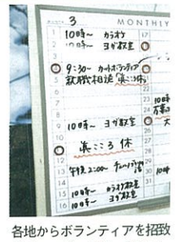
避難所にたどり着きましたが、そこは大混乱。誰がいて誰がいないのか、ようやく家族に会えたのは翌日の朝でした。「全員生きている家はほとんどなく、それが申し訳なくて避難所にいられなくなり、翌日には親戚の家に移ったんです」。ところが、14日に原発が爆発。子供たちを北海道に、両親は仙台に避難させ、夫と二人南相馬に残りました。「体調がよくなかった義父は、子供たちと離ればなれになって一気に悪化してしまったんです。それで、1学期の終了を待って子供たちを呼び寄せ、家族一緒に借り上げ住宅に住むことにしました」。海辺の家はあとかたもなくなり、いつ戻れるかはわからない状況。今は、中古住宅を購入し、一家でそこに暮らしています。

初夏、それまで遺体捜索にあたっていた消防団員の呼びかけで、被災者のために次に何が必要なのかを考え始めました。原発の影響で極端に復興が遅れた南相馬でしたが、その頃には仮設住宅への入居も始まり、町はようやく落ち着きを取り戻し始めていました。「南相馬市は、3つの町が合併してできたばかりで、仮設住宅にはいろいろな地区の人たちが集まっていました。みんなが集まれて友達になり、情報交換できる場所が必要、と考え、支援をいただきながら『和みサロン 眞こころ』を8月に開いたのです」。そして、今では3カ所の仮設住宅集会所で、サロンを運営するようになりました。

テーブルや椅子、マッサージチェアを置き、お茶菓子とお茶を用意して、松野さんは週に6日9時～16時、ボランティアで来訪者の応対をしています。サロンは常時お年寄りでいっぱい。「ここがなかったら大変。部屋にこもりっぱなしになってしまう」と言うおばあさんも津波で自宅を失った一人。サロンに集うことが仮設に住む方たちの息抜きなのです。

「ボランティアを招致して、ヨガやエステなどをしたり、イモ煮会などイベントを開いたり。部屋から出てみんなが顔を合わせられるようにしたいんです」と言う松野さん。自身も被災している中で毎日ボランティアをするのは容易なことではありません。「何かやっていないと落ち着かないんです。子供たちを南相馬に戻したことがよかったかどうかも、まだわからない。ここで年配の方の話を聞くと、ああ、そういう時代もあったんだなと思ったりして、迷う自分のためにもなっているんです。自分だけじゃなく、できればみんな一緒によくなりたい。批判もあるだろうし、勝手にやっていることだけど、ちょっとでも役に立つならそれでいい」。そう言って、おじいさんのカップにお茶を注ぎ足します。

「家族を亡くした方の中には人が集まる場にも来られない方もいます。深い傷を負った人に『頑張れ』なんて言えません。でもだからこそ、声に耳を傾け、寄りそう気持ちを持っていたい。そうして、ちょっとのことでも幸せを感じられる人になりたいと思っているんです」



各地からボランティアを招致などでいっぱいです。「ボラン直接の受け入れもしています

南相馬市は、津波被害に加えが重なり、復興は著しく遅れ童数は復活せず、今後の見通

今、被災地に必要なこと

放射能のついた瓦礫を県外に持ち出したいなんて誰も思っていません。処理してリサイクルできる施設を福島に作ってほしい。これだけの犠牲を出した分、今よりもよくならなければ、亡くなった方に申し訳ないから。

先の見えない不安を抱えて、今を精いっぱい生きる

お客様に喜んでもらえること。それが今の自分が生きていく糧になっています

竹澤香織さん（36歳・美容師）

去年9月、いわき市内にオープンした美容室「レガロ」（☎0246-38-6664）にて。スタッフは全員、元の美容院で働いていた仲間。

福島第一原発のまたがる双葉町に住んでいた竹澤さん。働いていた美容室も避難区域に指定されている大熊町にありました。震災の翌日には、原発の放射能漏れで避難勧告が発令されます。「あの日から、行くところも帰るところもなく、仕事もこの先どうなるかわからない、先の見えない生活が始まりました。3・11は、私にとって、自分の人生で今まで築きあげてきたものが音を立てて崩れていくような、辛い出来事でした」。

そんな転々とする避難生活の中、唯一の救いとなったのが、勤めていた美容室のオーナーが言った「必ず会社を復興させるから心配するな」という力強い言葉でした。そしてオーナーは言葉どおり、去年5月、日立市内に1店舗目の美容室をオープン。さらに9月にいわき市内に2店舗目をオープンさせます。

「自分が一家の大黒柱として家族を支えるしかない。何とか自立していかなければいけない。そんな思いで、避難していた埼玉の住宅に母と娘を残し、一人、日立で美容師の仕事を再開する決心をしました」

そして去年の9月には、地元に近いいわき店へ異動。「オーナーが被災した従業員のために作ってくれた店舗を、大熊町の店舗のように、どうにか活気づけていきたい。今は、新しい町で新しいお客様に喜んでもらえることが、いちばんの喜び。そういう一瞬一瞬が大切で、ささやかな喜びをかみしめています」。

仕事をしていると不安なことが忘れられるという竹澤さん。「今は一日一日、目の前のことをやり、生きていくのが精いっぱい。だけど福島の人は辛抱強く頑張っている、そのことを忘れないでほしいです」。

震災当時、美容院から財布と車の鍵、大事な商売道具であるシザーセットだけを持って、目の前の駐車場へ避難しました。

今、被災地に必要なこと

福島県には原発の問題があります。避難区域はもちろん、福島に住んでいる人は、目に見えない恐怖と戦っています。いわきも普段どおりの生活に戻っているようで、戻っていない。そのことを忘れないでいてほしい。

復興支援は必要な仕事。でもいつか自分の夢だった日本語教師に復職したいんです

千葉久美子さん（36歳・「JEN」総務広報）

ボランティアの派遣、被災者の生業支援、コミュニティ支援などを行っているJEN。現地スタッフの多くは被災しています。

千葉さんは震災まで、仙台で日本語教師をしていましたが、家を失い、津波で鉄道も寸断されたため通勤ができず、仕事を断念しました。職安で見つけたのがJENの総務の仕事。何をするのかもよく知らないまま仕事を開始、被災者でありながら、復興支援事業に携わることになったのです。「被害の大きい牡鹿半島に初めて足を運んだのは10月の初め。津波の爪痕がまだ色濃く残る現状にショックを覚えました」。今は、JENで地域の復興を支える役目を担う千葉さんですが「いつかは、また、日本語教師に戻りたいと思っています。天職だと感じていたし楽しかった。今の仕事は、必要とされているし、とてもやりがいがあり、一生懸命に取り組んでいます。自分が地域の復興に携わっているという実感もあるんです。でも、町が元気になり、チャンスが巡ってきたときには、自分の得意なところを発揮できる教師に復帰したい」。夢だった仕事を失った千葉さん。その夢を再び取り戻すことこそが彼女にとっての真の復興なのです。

家は天井近くまで浸水。住めなくなりました。今は山の上の祖母の家に間借りして、徒歩で通勤しています。

私たちにできること、まだまだあります

JENでは引き続き石巻で漁業支援、コミュニティ支援などを中心に活動するボランティアを随時募集しています。スケジュール、詳細はhttp://www.jen-npo.org/でご確認ください。1日でも参加できます。

今、被災地に必要なこと

JENでは石巻地区で人々が自立した生活をとり戻すまでを継続的にサポートしており、活動のため緊急募金を受け付けています。石巻からのメッセージも随時お知らせしています。http://www.jen-npo.org/